

## 腭癌に対する重粒子線治療の照射方法の検討

放射線医学総合研究所 1)

千葉大学 医学薬学府薬学府 先端医学薬学専攻 2)

JCHO 東京高輪病院 3)

塩見美帆 1-3)、森慎一郎 1)、山田滋 1,2)、安田茂雄 1)、鎌田正 1,2)

【背景・目的】手術不能腭癌は予後不良の疾患であるが、近年、腭癌に対する重粒子線治療で治療効果の改善が報告されている。重粒子線治療の線量増加を目的として、scanning法の照射方法について比較と検討を行った。

【方法】2013年10月から2014年3月に当院で腭癌に対してpassive法で重粒子線治療を施行した14例を対象とした。年齢は中央値63歳(35-84)、性別は男8例、女6例、臨床病期(UICC7th)は、IIA期2例、III期9例、IV期3例、腫瘍占拠部位は、腭頭部7例、腭体部7例、GTVの中央値は10.9 cc(1.7-47.4)、照射線量は55.2GyE/12分割である。治療計画装置はXioN2を用い、最大呼気時のCT画像に対してコンツールを行い、scanning法による0° 90° 180° 270°の4門照射と0° 165° 180° 195°の4門照射のDVHを比較した。

【結果】0° 165° 180° 195°の4門照射では、脊髄・腎臓への線量が高くなる傾向であったが、DVHより許容範囲内であり、一方、胃・十二指腸(1st-2nd portion, 3rd-4th portion)への線量は改善した。

【結語】Scanning法は、消化管への線量を低減することができる有用な照射法である。